学力づくりの最前線！

学力の基礎をきたえ どの子も伸ばす研究会ニュース

学力研の広場

ホームページアドレス http://gakuryoku.info/

NO. ３４９

2024. 4. 13

学 力 研 発行

常任委員長 岸 本 ひとみ

郵便振替 00920-9-319769

“仕切る人”“協力する人” を明確にし、自覚的、自治的なクラスをつくる

世の中には必ず“仕切る人間”と“協力する人間”がいて、物事が進んでいきます。したがって、4月と5月の「久保ワールド」で展開しなければならない課題は、先生の提案に従い、協力することの意義をしっかりと教え、どうすることが協力することになるのか、協力するためにはどのように体を動かし、どのように発言し、どのように工夫するのかを考えさせ、行動させることです。（中略）

5月に入ったら、直ちに班会議、リーダー会、学級会を開く準備をして、クラスの課題について、自治的な取り組みの初歩を始めなければなりません。そして、そこでのテーマは「先生がいなくても、みんなでできるしくみをつくること」「みんなで仲よく、楽しいと思えるクラスにするために、何をどうすればよいかを考え、行動すること」です。

久保齋「先生のための学校 クラスづくり・授業づくり」（2010.3 小学館）

新学期が始まります。何年経ってもこの時期は不安と緊張でいっぱいになります。１年間のうちで最も大切だと言われる４月。１年後の学級のイメージを持ち、しっかりと準備をして子どもたちと良いスタートを切りましょう。（李）

CONTENTS

◇特集「４月に大切にしたいこと」◇

あせらず、ゆっくり向き合う　加藤英介・・・・・・２

一年後を見通す学級開きとは　丸小野聡暢・・・・・４

四月に大切にしたいこと　～この一年を見通して～　小川慶子・・・・・・７

４月に大切にしたいこと～クラスが安心できる場所であるように～　岸本ひとみ・・・・・９

◇連載◇

「どの子も伸ばす」を本気で考える連載63「意欲格差」に負けない！公立小学校へ　岡本美穂・・・・・１１

考える力をつけるための授業の組み立て方⑧なぜかの追究が授業を構成する　荒井賢一・・・・・１３

社会科（歴史）授業力アップ講座　⑮　教材研究③　深澤英雄・・・・・１６

「先生のための学校」教師教育の復権　久保齋・・・・・・１８

「春の先生のための学校・オンライン・第１回」講座報告　鈴木基久・・・・２０

子どもの自己肯定感と学力研実践　高垣忠一郎さんを悼む　山口左知男・・・２２

局長・常任委員長だより　・・・・・・・・・・２７

学力研カレンダー　・・・・・・・・・・２８

あせらず、ゆっくり向き合う

加藤　英介

準備で9割は決まる

4月意識することは、始業式までに年間計画や学習内容の見通しを把握することです。また、クラスのゴールを具体的にイメージして手立てを考えることです。この準備をしておくことで、子どもたちが来ても落ち着いて対応することができ、突発的なトラブルや指導があっても冷静に対応することができます。

授業面では、最初の5分の取組を予め決めておき、準備を入念にし、チャイムと同時に授業が始まるように仕組みます。国語は「漢字学習・フラッシュカード」算数は「音声計算・百マス計算」理科は「教科書音読」社会は「地図帳クイズ」学活は「隣の人にありがとうを伝える」など決めておくことで、自分達で学習できるという雰囲気と小さな自信を積み上げていきます。もちろん、素直に全員が動くわけではありません。中には、立ち歩いたり廊下に出ていたりするやんちゃな子もいます。しかし、まず優先すべきはクラス全体です。クラスが学習する雰囲気になるとやんちゃな子もやろうとしてくれるときが必ず来ます。そのときまで、根気よく声を掛けて見守っています。いつもやらない子が席に座った瞬間、挙手をした瞬間、友達をほめた瞬間などきっとそんな輝くときがあるはずです。その瞬間をキャッチできるのは担任しかいません。普段はいけないことをしていてもそのよいところを切り取ってほめていくことで前に進めることができます。そのためにも、時間のあるときに入念に準備をしておきましょう。心にゆとりをもつことで子どもへの接し方も変わります。

トラブルはチャンス

生活面では、トラブルはチャンスと捉えることです。4月最初に、クラスで殴り合いのけんかをしていたら、どのように指導しますか。「こら！」と高圧的な指導ですか。それとも「どうしたの？」と子ども目線で話を聞く指導ですか。実際の状況にもよりますし、様々なパターンがあると思います。僕が、行っているのは「けがの確認・事実確認・次への確認」です。まず、二人を引きはがしてけがはないか確認します。けががあれば簡易処置します。次に、何があったのか事実確認をします。互いに冷静な場合は二人で聞きますが、イライラしている場合は一人ずつ聞きます。そうすることで、時間差が生まれ、イライラした気持ちをほぐすことができます。また、説明している間に自分がしてしまったこと、こうすればよかったという原因と本当にすべき行動を振り返ることができます。そして、どうしたら仲良く楽しくできたのかを互いに話させます。ここで大事なポイントは「謝る」ことがメインではないということです。よくあるのが「〇〇がいけなかったでしょ」「謝りなさい」と教師が指導する場面です。確かに正論です。しかし、その正論を子どもが納得しているかどうかは別の問題です。「先生が謝れといったから謝った」となっては1年間、その子との関係は難しいでし

よう。最悪の場合、子どもとの関係だけでなく保護者との関係も崩れてしまいます。最初の指導が肝心です。トラブルが起こったときに先生が「トラブルはチャンス」だと捉え個人とクラスに対して、けんかをしたときの解決法を伝えていきます。けんかは二人の問題ですが、その出来事はクラスの誰もが起こりうることです。教室の一人ひとりに、自分事として考えさせることで、集団として高めるきっかけとなります。

互いの話す場面では、次のように声をかけます。「〇〇くんは△△って思ってたんだって。そこまでわかるかな。」「実はそれはよくないなぁって思ってたらしいよ。どう思う。」「仲良くしていたけど◆◆があったからすれ違ってしまったんだね。」「先生、今の二人の話を聞いて思ったんだけど、けんかしたくてしたわけじゃないんだね。気持ちがすれ違っただけだったんだ。互いに伝えたいことはありますか。」と教師が子どもの意見をワンクッション置くことで互いの意見を理解し合うようになります。

クラスには、次のように伝えます。「〇〇さんと△△さんはけんかをしました。みなさんどうしてけんかをしたと思いますか。

（意見を聞く）なるほど。二人に聞くと最初からけんかしていたわけじゃなかったのですね。仲良く遊んでいたけど、ほんの一言や少しの行動がきっかけとなってお互い嫌な気持ちになってしまったんだ。みんなもそういうときってあるよね。二人はそのあと、自分のいけないことを相手に伝え、次どうするかを自分の言葉で話していました。これってなかなかできるようでできないことです。相手のせいにしてしまったり自分は悪くないという人もいたりするからです。でも〇〇さんと△△さんは自分の行いを反省して、次へ向かうことができました。けんかは仲良しだからこそ起こることです。一人でけんかをする人はいません。仲を深めたいからこそけんかが起こります。そのすれ違いを互いが認めたときにこそ、真の友情が生まれます。そんな二人に拍手。」このように、二人の問題をクラスに語ることで、けんかをしたときの対応を伝えつつ、この先生は困ったときでも助けてくれるかもしれないという雰囲気を醸し出すことができます。

今回は「準備で９割は決まる」「トラブルはチャンス」について書きましたが、この二つを中途半端にした場合、クラスは崩壊に向かう傾向があります。授業はその場限りでなんとなく終わってしまう。トラブルに対して、高圧的に指導したりけんかは悪という見方を教師がしてしまったりすると子どもたちは委縮します。陰でいじめをしたり不登校になったりします。本当に伝えるべきことすら伝えられなくなり、大きな事件へと発展します。ハインリッヒという法則があります。これは、「1件の重大事故の裏には29件の軽微な事故と300件の怪我に至らない事故がある」というものです。ささいなことこそ大切にし、子どもたちに語ることで、時間はかかりますが、力をつけることができます。4月は、あせらず、ゆっくり、一人一人と向き合いながら子どもとつながり、クラスの関係づくりに目を向けていきましょう。始業式の新たな出会いに向けて準備を入念にし、指導の仕方やトラブルの対処法など時間のあるときに学んでおきましょう。今年度もどうぞよろしくお願いします。

一年後を見通す学級開きとは

丸小野　聡暢

一年後の子どもの姿

『お互いが尊重し合って学校生活を送れた』『男女の仲が良く、協力して一丸となって行事に取り組めた』『一年間、このクラスで良かった』『同じクラスになったことがない人がほとんどで不安だったけど、一年間とても楽しかった』『積極的に関わって仲良くなろうとしていた』『誰かが失敗したときも誰も責めないで、男女関係なく助け合ったり協力したりできた』これらの感想は、昨年度の私のクラスの最後の日の子どもの言葉です。

４月に大切なことは、一年後に「どのような子どもに育ってほしいか」「どのようなクラスになってほしいか」と教師が一年後の子どもたちの姿を思い描くことです。私であれば「自治的なクラスになってほしい」「友達を大切にする子どもに育ってほしい」と思っています。子どもの言葉からも分かるように、昨年度は思い描いたようなクラス・子どもに育ちました。なぜ、教師の願いが必要なのか。それは、教師の願いが、普段の教師の子どもたちへの声掛けや一貫性をもった指導へつながるからです。

学級開きを考える

先生方は、学級開きにどのようなことをしますか。教師にとって学級開きは大切な日でありますが、子どもにとっても期待だけでなく大きな不安や迷いもあります。毎年、４月になるとどのようなことをしようかと悩まれて、本を読んだりネットで検索したりする先生方も多いのではないでしょうか。しかし、大切なことは何をするかではなく、何を大切にしているかを伝えることです。私が初日に心がけていることは、子どもたちに「安心感」を与えることです。子どもたちに「このクラスなら一年間やっていけそう」「このクラスなら居場所がありそうだな」と感じてもらえたら学級開きは成功です。そう感じてもらうには、初日の教師の言動が大切です。安心感を与えるために必要なことは「丁寧さ」です。子どもたちは、初日は不安です。その不安を取り除いてあげることが安心感につながります。「今日することは何なのか」「これからどうすればいいのか」と伝えると子どもたちは見通しをもつことができます。高学年を担任すると自治的な集団を目指すために最初から指示を出さずに考えさせることが大切だという先生もいらっしゃいます。どちらの考えも間違っていないと思いますが、私は「丁寧さ」で子どもたちに安心感を与えます。また、「笑顔」も安心感のポイントです。笑顔からは「楽しそう」「優しそう」など様々な教師の気持ちが読み取れます。教師の表情一つで子どもたちは、安心するものです。その上で、教師の願いや思いを伝えることが大切です。学級開きというと何か特別なことをしようと考えがちですが、そうではなく、ブレない一年間のスタートをきることです。よくありがちな失敗は、学級開きに仕込みすぎたことをして、だんだんと子どもたちの期待を裏切ることです。期待とは、最初は面白くて優しい先生だったのに…面白くない、いつも怒って

いる…とならないことです。そうではなく、自分に背伸びすることなく誠実に子どもと向き合うことが大切です。また、一年を通して大事なことは「信頼」を得ることです。信頼なくして学級経営は成り立ちません。指導の時に、何を言うかではなく、誰が言うかが子どもにとっては大きいのです。こんな経験はありませんか。同じことを言っているはずなのに、あの先生の話は聞くのに、私の話は聞いてくれない…。この違いは、先生に対して信頼があるかの問題です。稀に、強い指導の先生が成功することもありますが、それは怖さではなくどんな場面でも誰に対しても一貫性のある指導をしていることを子どもは知っています。ただ、怖いだけなら「めんどくさい」と思い、その場をやりすごしているだけでしょう。信頼は、一日で獲得できるものではありませんので、日々の関わりが大切になってきます。

学年（学級）目標の設定

4月に一年間の目標を設定すると思います。結論から書くと目標は抽象的で様々なことを包括しているものがよいです。なぜなら、何かあるとそこにかえるべきものだからです。では、どのようにして決めていくかというと、私は、前年度の集団としての成果と課題を前学年部の先生方に確認をします。そして、始業式までに学年部で、一年間で育てたい子どもの姿を共有します。そこから、仮の学年目標を決定します。同じことを学年集会で行います。子どもたちに自分たちの集団としての成果と課題を確認します。その後、どんな目標がいいのか尋ねます。子どもから出される目標は具体的なことが多いです。そこで、「先生がこれらのことをまとめてきていいかな」と確認をして後日、発表を行います。

私が心がけていること

私が心がけていることはいくつかあります。教材・授業研究を行うことは当然ですが、ここでは明日からできることを伝えます。一見、教師としては関係ないことかもしれませんが、人と付き合う中では大切なことです。

・清潔感・心からの笑顔・親しみやすさ
・穏やかさ・毎日の声かけ・一緒に過ごす

ここで全てを伝えることはできませんので、「毎日の声かけや一緒に過ごすこと」について詳しく述べたいと思います。

私は、高学年を担任することが多いです。最近は年齢とともに、子どもたちと年齢差は開くばかりです。子どもの話題についていけないこともありますが、どうやって子どもの信頼をつかんでいるかということです。それは、毎日のコミュニケーションです。私は、出勤後すぐに教室に上がります。そして、子どもたちが教室に入ってきた時や宿題を出す時に必ず声かけをします。「おはよう」と一言だけの時もありますし、「昨日〇〇見た？」と話しかけることもあります。とにかく、1日の中でクラスの子全員と会話をします。こちらから声をかけていると、そのうち子どもから話しかけてくるようになります。一緒に過ごすというのは、遊んだり仲良く話したりするわけではなく、教室で仕事をしながら座っているだけです。同じ空間に先生がいるだけで安心するものです。子どもたちが安心できる教室づくりを実現していきましょう。

四月に大切にしたいこと　～この一年を見通して～

春日井学力研　小川慶子

子どもに出会うまでに

昨年四月、再任用教諭から常勤講師になりました。赴任先が決まったのは始業式後で、四月一四日に子どもに出会うまでに渡されたのは、男女混合名簿一枚でした。困りました。名前の読み方も分からず、性別も分かりません。出遅れた分を取り戻すため、当番グループや座席の配置を考えようと思っていたのにできず、焦りました。

いつもなら当たり前にしていた、氏名・性別、アレルギーの有無や特性など配慮すべきこと、前担任からの申し送りなどの確認をし、受け入れる準備を万全にした上で出会うことの大切さを痛感しました。

一年を見通して

四月は新年度のスタートです。子どもたちもやる気に満ち溢れています。この気持ちを良い習慣作りに移行させていくために考えておきたいことは、次の三つです。

○子どもを知ること
○教材を知ること
○一年の流れをつかむこと

子どもを知ること

基本的な情報をもとに、自己紹介カードやミニ日記を書いたり毎朝のスピーチを順にしたりする活動や出会った子どもたちとの関わりから、さらに子どもの理解を深めていきます。スピーチやミニ日記は、今後一年間続けていきます。

学習面では、実態調査をします。既習漢字や計算など前学年までの学習を振り返られるものをします。実態調査で分かった不十分な点を中心に「さかのぼり指導」の内容と期間を考えます。担任としては「どこまでさかのぼるか」を見極めるものですが、子どもには、「どこまでできる」チェックというプラスの意味合いを示すようにします。

教材を知ること

学年ごとに、最重要課題があります。特に算数では、一年生なら「（一位数）＋（一位数）の繰り上がり」「（二０までの数）－（一位数）の繰り下がり」、二年生ならかけ算九九、三年生なら「わり算」…などです。最重要課題にじっくり取り組むために時間をどうやって確保するか、「さかのぼり指導」や日々の学習・宿題などで何ができるかなど、四月の時点で単元の軽重が考えられると効率的に時間が使えます。

昨年度は三年生を担任していました。三年生では、国語辞典の使い方を学習します。また、新出漢字も２００字と多くなります。そこで、「国語辞典の使い方」を四月当初にもってきて学習し、新出漢字の学習と絡めて、新出漢字を使った熟語の意味を調べ短文を作ることを毎日の宿題に織り込みました。毎日取り組むことにより辞書引きが速くなるだけでなく、その前後にある言葉にも目が行き、思わぬ発見があったり類義語

を調べたりすることもでき、学習が広がりました。

一年の流れをつかむこと

子どもたちが自分の成長を感じ、またそれを自分を応援してくれる大人に見てもらえる機会をたくさん作ることは大切なことです。そんな「輝きの場」をどこに置くかを考えます。

年度当初に出される年間行事予定を見て、授業参観・運動会・作品展（またはそれにかわるもの）・六年生を送る会など、成長を見てもらえる行事を確認し、それぞれの場面でどんなことを見せられるかを考えます。そして、発表のために必要なことを洗い出します。

例えば、六年生を送る会にリコーダーのこの曲と考えれば、少なくとも一月には練習を始めたいですし、音楽専科の先生にも話を通し、できたらご指導いただきたいとなります。さらに音楽の時間を丸投げするのではなく、年度当初から連絡を密にして学級でも基本練習をするなど早ければいろいろ方法が考えられます。

複数回ある授業参観なら、毎回違う教科で、回を追うごとに子どもの成長が分かるようにするとか、運動会・作品展のような発表会ではどんな姿が見せられるかなど具体的に考えれば、そこまでのアプローチの仕方がはっきりしてきます。

そして、来年の三月の子どもの姿を思い描きます。今の実態と目標の姿との間に必要なものは何なのか、どんな手立てで必要な力をつけていくかを考えます。

四月当初に行われる「授業参観・学級懇談会」の折には、久保先生がよくお話しくださる「保護者に確約する」ができるようにしたいです。

みんなですると楽しい

新しい学級が楽しいと感じさせるためには、「みんなですると楽しい」と感じさせることが一番です。遊ぶのはもちろんですが、たとえ勉強でも感じてもらいたいです。

それに一番良いのが、努力が結果に直結する計算練習です。「さかのぼり指導」を兼ねた五分間マス計算をします。どの子も前向きに取り組めるよう、「昨日の自分に勝つ」を合言葉にタイムを計りますが、タイムよりも「間違いがないことが大事」「得点は百点−間違えた数」を強調します。最後に「百点だった人」「昨日より点数が上がった人」「できた問題数が増えた人」「タイムが上がった人」というように挙手させて拍手がもらえるようにします。短時間を短期間取り組み、成長が感じられるので、自信がつくと同時に、一緒に取り組む仲間と喜びを分かち合うことが期待できます。

もう一つは、「漢字の先生」です。新出漢字を順番に担当し、漢字の筆順・読み・熟語とその意味・熟語を使った短文を発表します。宿題の発表になっているので、楽しく宿題にも取り組めます。

「学校に来るのが楽しい、勉強が楽しい、友達と遊ぶのが楽しい」と言ってくれる子どもが一人でも多くなるように「読み・書き・計算」の学習を通して自信をつけ、遊びの中で豊かな経験をし、友達との関わり合いの中で互いのよさが感じ取れる学級経営をしていきたいです。

「学力づくりで学級づくり」を目指して。

4月に大切にしたいこと

～クラスが安心できる場所であるように～

加印いろえんぴつ　岸本　ひとみ

始業式までの基礎作業

この広場が届く頃には、みなさん始業式を終えて一週間がたった頃ですね。ここに挙げる基礎作業は、すべて終えられていると思いますが、念のため。

〇子どもの氏名を覚えている。
〇物の収納場所が明示してある。
〇これからする作業の内容がはっきりしている。
〇できているかどうかを、丁寧に確認している。
〇各教科の目標を、子どもにわかるように示している。

これらができているかどうかの判断基準は、各教科のノート指導でわかります。１週間たてば、ほぼ全ての教科を網羅して学習が進められているので、一度、ノートを回収して、全員がきちんと指示通りにノートを作っているかを確認する必要があります。

※もちろん、１年生は除きますが。

子どもたちの様子を見てから柔軟に

実は、私は、ノートの配布は始業式に一気にはしていません。各教科ごとに、使い方を指導しながら、新しいノートを持たせるようにしています。

「はい。じゃ、社会科のノートです。社会科は横書きなので、左開きになりますよ。バーコードがついていない方が、表紙です。社会科って書いてあるシールを貼りましょうね。そして、名前を丁寧に書きましょう。」

３年生の社会科初日です。

あとは、３年生の社会科で習うことを、教科書をめくったり、デジタル版があれば、特徴的な学習内容を見せたりします。そして、

「社会科って、どんな学習か少しはわかりましたか。わからないことや、疑問に思ったこと、コメントなどをノートの１ページ目に書いて下さい。後で集めますよ。」

というのが、社会科の授業びらきです。保健や理科についても同様です。

係の仕事やそうじ分担もフレキシブルに

毎年、始業式の前に給食当番表やそうじ分担表などを、とても美しく制作されている姿を見て、心の中では、(本当にそれでだいじょうぶなの?)と思っています。

例えば、そうじ当番で、前年は４人で分担してできていたろうかそうじであったとしても、今年の子どもたちがその人数でできるかどうかはわかりません。もしかしたら、２人で完璧かもしれませんし、５人がかりでも難しいかもしれないのです。

前年の人数は参考にしますが、いつでも作り変えることができる表示にしておくこ

とが望ましいと考えています。つまり、始業式までに作ったものは、仮の当番表なのです。

あまり美しく整ったものを作ってしまうと、その表示に縛られて、子どもの実態と乖離してしまうことがこわいのです。特に、支援を必要とする子どもたちが多いクラスでは、柔軟な対応が求められます。1カ月ごとに作り変えたり、学期ごとに変えたりするのが当たり前ではないでしょうか。

学級目標はGW明けに

4月は子どもの実態把握に努め、お互いの信頼関係を築くのを第一目標にしています。学級目標を決めるのは、だいたい5月の初旬になります。

「先生は、あなたたちと一カ月過ごしてみて、こういう長所と短所があると思いました。で、今年のクラスの目標を考えるのに、『みんなで伸びる』という言葉を入れたいと思うのですけれど、どうでしょう。」

と、提案していきます。

その頃には、中学年以上だと、司会団や記録係などが育っていますし、低学年でも自分の意見を言えるようになってきています。学年目標があるのなら、その中から言葉を選んで提示していくのもいいでしょう。

始業式の日に、目標をバ〜ンと提示して、そこから1カ月たって子どもたちに具体的な内容を考えさせて、最終確定するというやり方もあります。

要は、子どもたちがどう考えているのかを加味していれば、それでいいのです。教師サイドからの目標提示だけでは、1年間を過ごすのが難しいのではないかと思います。

困りごとがいつでも出せるように

1年生のクラス会議の議題です。

○朝、妹がなかなか保育園に行く用意ができなくて、登校班に送れそうになります。
○□□さんが、遊ぶときに、ルールを守ってくれなくて、つまらないです。
○そうじの時、水が冷たくて、ぞうきんがうまくしぼれません。
○給食の牛乳を早く飲むコツが知りたいです。お代わりしたいものがあっても、牛乳が残るのでできません。

大人から見れば、なんてたわいのないと思うことでも、子どもたちからしたら、真剣な困りごとなのです。これを、みんなで、ああだこうだと言って解決方法を考えていきます。うまく解決できなくったっていいのです。みんなが、困りごとを知って、いっしょに考えてくれることを大事にしています。声が小さくて、なかなか自分の意志表示ができない子には、代わりに言ってくれる子がいればいいのです。

そのうちに、学習に関しても困りごとが出せるようになってきます。漢字が覚えられない、計算カードのめくり方が難しい、タブレットのパスワードが難しい、などなど。子どもたちのアイディアで思わぬ方法が見つかることが多いです。

子どもの困り感って、とても大切なもので、そこからスタートすることを基本にしていれば、クラスの進む方向としては間違いないのではないかと、ぼちぼち進んでいます。

「どの子も伸ばす」を本気で考える連載　66

「意欲格差」に負けない！公立小学校へ

事務局長　岡本　美穂

■この一年間の学び

教師生活17年を終えようとしています。自分はこの一年、休むことなく最後までやり遂げることができましたが、何度も何度も逃げ出したい気持ちに襲われました。（詳しい事情は話すことはできませんが・・・）こんなに苦しい一年はありませんでした。ただ、その苦しみも無事終わった今は感謝しかありません。自分の世界が明らかに広がったからです。今までだったら気にもしなかった本を読みまくったり、他の業種の方のお話を聞かせてもらえたり、そのつながりでベストセラー作家である樺沢紫苑先生にも直接お会いしてお話もたくさんさせて頂けました。

その出会いの一つに「仕事休んでうつ地獄に行ってきた」という本があります。私は偏見がありました。うつになる方は繊細で、自分とはかけ離れた存在だということです。しかし、一番苦しい気持ちになっていた時の自分と同じ気持ちが本には詳しく書かれていました。

それまでずっと100％の全力疾走できました。決して後ろ振り返らず前進あるのみ。ひたすら突っ走っていました。忙しすぎて大変なことも多々ありましたが、順風満帆な思い通りの人生を結構楽しんでいました。

でも、よくよく考えてみると、他人から順風満帆な思い通りの人生を歩んでいる人と羨望の眼差しで見られていることをかなり意識していたのですね。丸岡さんってほんとに幸せな人だよね。うらやましいと羨まれることに重きを置いていたところがあったのですよ。

地方から出てきて階段を駆け上っていく。ラッキーがある。そんなイメージの丸岡いずみ像を壊さないようにしながら、とにかく頑張ってきたのです。そういう生き方が普通になっていると、無意識のうちに次々と何なりしなくていけないリストが生まれ、自分では気づかない小さなストレスにさいなまれていくのだと思います。長い間そうした無自覚のストレスに、さらされて、ボディーブローを浴びるように、少しずつ痛め付けられていたのかもしれません。

■他人は変えられない

努力次第でなんとでもなると思っていたところに、全く通用しない事象が起きました。しかし、ベクトルは自分に向いています。自分でなんとかしなくちゃ、自分が責任を持って期待に応えなくては・・・そんな思いでいっぱいでした。すると、不安やモヤモヤを同僚には言えなくなるのです。言っているつもりでも本音で言うことができていないことに気がつきます。そこからどんどん苦しくなっていきました。朝、仕事に行く前に涙が出る。夜中に不安になって目が覚めてしまい、そこから考えこんでしまう。仕事がこんなに辛く、苦しいと思った一年はありません。

教師として自信が持てなくなり、いつも「不安」になっている自分がいました。まさか自分がこんな風になるなんて思いもしません。追い込まれている・・・。この言葉がぴったりでした。そんな自分がなぜ乗り越えて笑顔で終えることができたのか？ポイントは２つあります。

■ポイント①

１つ目は、学力研の存在です。久保先生、

深沢先生に電話で相談し何度もアドバイスを頂きました。ここで大事なことは、学校以外に相談できる存在がいるかどうかということです。こういう状態になると、いろいろ考えて学校の人には言うことができなくなっていました。何時間も話を聞いてもらってはアドバイスを頂いていました。そしてまた不安になると相談していました。たくさんアドバイスを頂きましたが、心に残ったキーワードは

・寛容さ
・みんなのキャパを広げる
・事実を伝える
・公平さ
・丁寧に
・排除しない
・育っている子どもを鍛える
・心地よさ
・つめていっても×
・クラスが受け入れる

また講座で詳しく紹介しますが、学級づくりで大事なことは、解決できないこともあることを理解し、担任にも限界はあることを知ることでした。ただ、諦めず全力で丁寧に取り組むけど、うまくいかないからといってがっかりせず前向きいることの大切さを教えていただきました。

■ポイント②

２つめのポイントは「言語化」する大事さに気がつけたことでした。「『ありがとう』は魔法の言葉」という樺沢紫苑先生の言葉に、私は励まされました。

不安なりそうになると、朝から「ありがとう」をたくさん見つけて、伝えることで「嫌な感情」を少しずつ追い出すことができました。「親切は脳に効く」デイビッド・ハミルトン（著），堀内久美子（翻訳）という本も参考にしました。「人に親切にすると、自分にも幸福が訪れる」自己啓発書でよく出てくる主張ですが、それがスピリチュアルではなく、親切はセロトニンやオキシトシンの脳内の幸福物質を分泌することを科学的に明らかにしている点が類書と異なる点です。

〜書籍紹介より〜

人にやさしくすれば、めぐりめぐって自分にいいことがかえってくる――。こんな意味の「情けは人のためならず」ということわざがありますが、実は、これは科学的に見ても正しかったことがわかりました！

誰かに親切にするとき、見返りを期待しているわけではなくても、いい意味での「副作用」が得られると著者はいいます。親切は、親切にした相手だけではなく本人にも幸福感をもたらし、心臓と血管の健康によく、アンチエイジングにもなる。そして人間関係を改善し、「波及効果」によってさらなる親切を生むというのです。

このように親切が心と体、そして人間関係にいいのは、親切によって脳内幸せホルモン「オキシトシン」が分泌されるから。本書では、スコットランド出身の有機化学博士が、「親切の五つの副作用」とそれが起こる科学的なメカニズム、親切とオキシトシンとの関係、オキシトシンの増やし方などについて、最新の心理学、医学、生理学、社会学の研究結果を引用しながらわかりやすく解説します。さらに、巻末には今すぐに取り入れられる「自分でできる五十の親切な行為リスト」もまとめられています。

これをもとに3学期は学級づくりを進めました。するとある児童から最後の寄せ書きにこのようなメッセージをもらいました。

「岡本先生へ　一年間ぼくのいいとこを見つけてほめてくれたりとか、しかってくれてありがとうございました。」

一年間の苦労が報われた瞬間でした。だからこの仕事はやめられません。

考える力をつけるための授業の組み立て方⑧

なぜかの追究が授業を構成する

大阪教育サークルはやし　荒井　賢一

NHK「ヒューマニエンス　40億年のたくらみ「“植物”支配者は周りを動かす」で、イネのことが取り上げられていた。

現在、世界総人口の半分が、米を主食にしている。それはなぜかといえば、米すなわち稲（イネ）が、人に栽培しやすい植物だから。

多くの植物は、種がすぐに落ちたり、飛び散ったりするようにできている。なぜなら、種は遠くに運ばれることで、生育範囲を広げようとしているから。

一方、イネは種子が穂についたままの状態でいる。ちょっとそっと触ったぐらいでは、種は落ちない。

逆に、野生のイネは、ちょっと触れるだけで、種が散乱する。それゆえ、野生のイネの種を収穫するのは、すごく面倒なのである。

一方、栽培用のイネは、人が収穫しやすいように変異したことで、最終的に、生育範囲を広げたわけだ。

栽培される、ということは、人から面倒を見てくれるということである。水や肥料たっぷりの水田に植えてくれ、害虫からも守ってくれ、日々、世話をしてくれる。さらに、自分たちの子孫をまた次の年に植えてくれるのである。

イネが人を利用している、ともいえる。

考える力をつけるための授業をどう組み立てるか

さて、ここまで書いた「イネが人に栽培されやすいように進化した」ことを授業化する。

子どもたちに考える力をつけるために、どのように授業を組み立ていくといいだろうか。

①マルチ発問を考える。

答えが一つではなく多様にある問い（マルチ発問）は、子どもたちの情報格差を埋める手立てとして最適である。

イネは、漢字で「稲」なので、ノ木偏の漢字を出させる発問は、有効そうである。

ちなみに「稲」は中学で習う漢字であり、小学校で習うノ木偏の漢字は、「季」のような漢字も入れると、全14個である。

【1年】なし
【2年】科・秋
【3年】委・和・秒
【4年】利・季・種・積
【5年】移・程・税
【6年】秘・穀
【中学生】秀・香・称・租・秩・稚・稲・稿・穂・稼・稽・穏・穫

稲作中心の日本で使われてきた漢字なので、のぎ偏の漢字は、稲に関わるものが多い。どの漢字が「稲」と関係があるかを探させると面白いかもしれない。

例えば、「税」であれば昔は稲（米）が税金として治められていたことや、「秤」も稲（米）の量を正確に測るために作られたことなど。

②なぜかを問い、理由を考えさせる。

ノ木偏の漢字をながめると、なぜかを解いたくなる漢字が、いくつも見つかる。

例えば「秋」。なぜ、ノ木偏に「火」で秋なのか。

実際に子どもたちに問うてみると、

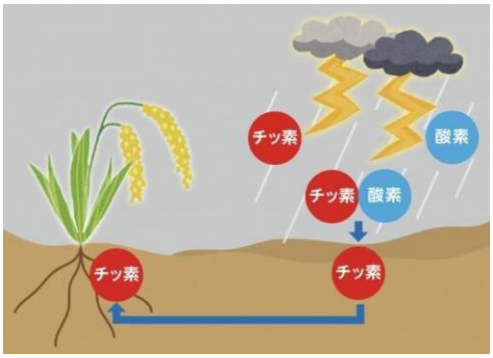
・秋は葉が火のように赤くなるから。
・秋にたき火をするから。

などの意見が出される。
　例えば「種」。なぜノ木偏に「重」いなのか。どちらかといえば、軽いと思える種の方が多いのに。
　「稲」の熟語となる言葉には、多くのなぜが見つかる。
　例えば、「稲妻」。なぜイナズマが稲の妻なのだろうか。
　例えば、「稲荷」。いなり寿司、稲荷神社、そもそも「稲荷」とはなにか。
　このような疑問が、授業の中核となっていく。

授業プラン「稲の戦略」

【板書】春夏□冬
「□に入る漢字をノートに書きましょう。」
【板書】春夏秋冬
「何と呼びますか。」
・はるなつあきふゆ。
・しゅんかしゅうとう。
「秋という漢字だけ、他の季節の漢字と形が違いませんか。秋はなぜ、のぎへんに火なのでしょうか。」
思いつく子、知っている子に発表させていく。
その後、「のぎへん」が穀物を意味し、「火」が「収穫した穀物を天日干しで乾かす」「害虫を火で追い払う」などの意味があることを教える。
「秋の訓読みは「あき」です。では、音読みは？」
・しゅう。
「実は、特別な訓読みで「とき」があります。なぜ「とき」と読むのでしょうか。」
発表後、「収穫の大切なときであることから」という理由を伝える。
【板書】（のぎへん）□
「のぎへんの漢字を書けるだけ、ノートに書いてみましょう。」
パスありの列指名で板書し、それ以外に書ける子に書かせていく。
その後、小学生で習うのぎへんの漢字、中学生で習うものを紹介していく。
【板書】稲
「何と読みますか。」
・いな。　・いね。
「稲のつく熟語を書ける人はいますか。」
（発表、略。）
【板書】稲穂
「稲穂を見たことがありますか。」
五円玉の裏を提示し、
「五円玉の表にも稲穂が描かれています。」
五円玉の表を提示。
稲穂の写真を提示し、
「こんな、俳句もあります。」
【板書】実るほど頭を垂れる稲穂かな
「どういう意味か、分かりますか。」
（発表後、簡単に説明。略。）
いなり寿司の写真を提示。
「何ですか。」
・いなり寿司。　・稲荷。
【板書】稲荷
「稲荷寿司を好物にする動物は？」
・狐。
「その狐をまつっているのが、稲荷神社です。稲荷神社の神様は、どんな神様か知っていますか。」
五穀豊穣の神、ウカノミタマを紹介する。
稲妻の写真を提示。
「何ですか。」
・稲妻。　・稲光。
【板書】稲妻
「なんで、稲に妻なのでしょうか。」
「雷の鳴る年は豊作だ。」
（鹿児島県　大正五年生まれの女性）
「稲光は一肥やし分ある。」
（福島県　大正十五年生まれの男性）
「この言い伝えは、正しいと思いますか。思いませんか。」（挙手で確認。）
「この言い伝えは、青柳智之『雷の民俗』に紹介されています。」
【板書】空気の成分　酸素…21％
　　…78％

「空気の成分は、酸素が21％です。78％は何という気体ですか。」　・チッ素。
「植物は空気中のチッ素を……直接取り込めません。」
でも、稲妻によって、窒素と酸素が結合し、それが雨にとけこんで地中に降り注ぎ、そのチッ素を植物が取り込む、ということを説明。



中学校ののぎへんの漢字から「稲」を取り上げ、小学校ののぎへんの漢字が「種」を取り上げる。
「知っている種を絵にかきましょう。」
描けた子から板書させていく。
画像で、いろんな種を紹介していく。

ツクバネ、ユリノキ…葉が翼となって飛ぶ。
キリ…小さいタネが舞う。
セイヨウタンポポ…綿毛で飛ぶ。
オナモミ…動物や人にひっついて移動。
ムラサキシキブ…鳥に食べられて移動。
スミレ…アリに運ばれる。
シラン…綿ぼこりのようにただよう。
最小かつ最軽量。

「今、紹介したタネの写真は、多田多恵子さんの『旅するタネの図鑑』に載っていました。このタネを多田さんは漢字ではなくカタカナで書いています。なぜでしょう。」
・漢字の種だと「重い」という感じになるから。
「タネはどうして遠くまで旅をしないといけないのでしょうか。」
ノートにその理由を書かせて、列指名＋挙手指名で発表させていく。
・自分たちの子孫を増やすため。
・新しい場所で根付くため。　など
『旅するタネの図鑑』の記述を読む。

タネはどうして旅をする？

花のあとには実が育ってタネができます。植物は動けませんが、タネは大地をはなれて移動し、新しい場所で芽を出します。
もしタネが運ばれずに親植物の近くで芽を出したなら、土の養分や光や水をめぐって親子の間や子ども同士であらそいが生じます。密だと病気もうつりやすく、虫や動物にも食べられやすくなるでしょう。だから植物は、身内との競争をさけ、生きのびるチャンスを広げられるように、タネの旅支度に工夫をこらすのです。

「タネを漢字で書くと、のぎへんに何でしたか。」　・重い。
「この重いタネは、どんな植物のタネのことを言っているのでしょうか。ズバリ、ノートに書いてみましょう。漢字でも平仮名・カタカナでもいいです。」
・書けた子からノートを持ってこさせ、○×をつける。
「イネ」もしくは「稲」と書く子が数人出たところで、発表させる。
ＮＨＫ「ヒューマニエンス　40億年のたくらみ「“植物”支配者は周りを動かす」の動画の一部を視聴させる。
「なぜ、イネは種が落ちないようになっていると思いますか。」
・その方が人間が取りやすいから。
「神戸大学の石川亮准教授が、そのことを研究しました。」
動画の一部を視聴させる。
（イネは人に収穫させやすくして生息範囲を広げていった。）
「イネは軽い種を重くすることで、自分たちの生息範囲を広げたのです。」

社会科（歴史）授業力アップ講座　十五

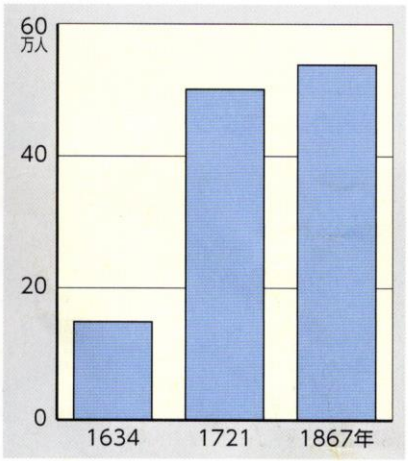
教材研究③

学力研常任委員　深沢　英雄

一、「つながり」を見つける事が教材研究

参勤交代が与えた影響が後の教科書の教材に出てきます。

一四七ページに、江戸の町人の人口の変化（江戸の町人の人口）のグラフが載っています。



①江戸の町人の人口の変化（江戸の町人の人口）

急激な人口増加の背景の一つに、参勤交代の制度化があげられます。諸大名が江戸に住むということは、その家臣たちも、それにともなう物資も江戸に集まることを意味します。

武士の人口が増えれば、その消費生活を支える商人や職人の数が増えるのです。このグラフは、町人の数ですが、ここに武士の数がプラスされるとどうなるでしょうか。一五一ページには、「一八世紀になると、人口が一〇〇万人をこえる世界最大級の年になりました。（当時、イギリスのロンドンが約九〇万人、フランスのパリは約七〇万人でした）。」とあります。

全国の武士が江戸に集まることで、各藩の交流が、武士階級の文化的一本化を促進したとも言われています。各藩の人が江戸で交わり、勉学やいろいろな交渉の中で互いに地方の文化を知っていきました。地方の文化を江戸にもってくる。江戸の文化を持って帰るという面がありました。五街道ということが資料として載っています。

②江戸時代のおもな交通

日本の主要な街道は天武天皇の時代「五畿七道」というものが決められました。六〇〇年代です。その後、鎌倉幕府が、各地の鎌倉街道を整備し、徳川の時代に五街道を整備していきます。参勤交代で年中大名行列が街道を往来することで宿場町の繁栄を促し、これまでの道の整備の積み重ねをより発展させる形になりました。

７「武士による政治の安定」という小単元の最初に出てくる大きな想像図や絵図は単元をつらぬく重要なものとして教科書は捉えています。この単元においては、「参勤交代」です。

歴史の前後には常に因果関係があり、いくつもの出来事の積み重ねによって形づくられていきます。

参勤交代だけで江戸時代を教えることはできません。しかし「参勤交代」という重要なしくみが、約２６０年間続く江戸時代にどういう影響を与えたのかということを教師は捉えておくことは大切です。江戸の人口と五街道のことを例に出しましたが、小学校教科書に出てくる資料の意味を考えることで歴史的な事項を点でなく、つながりのある線として教えるために教材研究を広く深くしていきたいものです。

二、一時間の授業の中での資料の「つながり」を考える

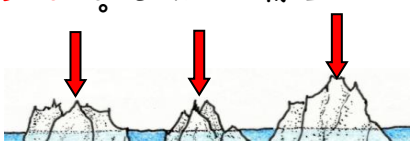
小学校の教科書教材は、二ページで一時間扱いになっています。二ページには、数点の資料（写真・グラフ・想像図など）と文からなります。

授業は一時間のめあてにそって、組み立ててていくものです。その時に、教科書に載っている資料や文をどう位置づけるのか、迷うことはありませんか？この資料や文はどういう価値があり、どう意味づけをするのか、一度読んだり、見ても分かりません。

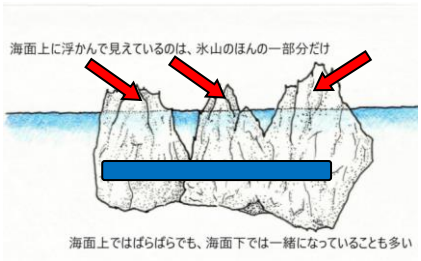
この資料は、どう扱えばいいのか、こんな資料はいらないのではないかと、分からない面を感じることが教材研究をしていつも思うことです。

でも、教科書を批判的に見ることも大事にしながらも、まずは、この資料を教科書が掲載している目的を探っていきたいと思います。「なぜこの資料は教科書にのっているの？」「この文の指示している意味は？」と考えていくこと、それが教材研究ではないかと考えています。一見、ばらばらで、一つ一つ独立しているように見える資料が実は、深いところでつながっていると分かった時に、教材研究っておもしろいなと思えます。

今回も氷山で、模式化すると、



海面に浮かんでいる氷山は、一見別々の氷山（資料や文）に見えます。でも・・・



来月は、見開き２ページの教材「古墳」を使って、つながりを考えます。

「先生のための学校」　教師教育の復権

学力研　先生のための学校　校長　久保　齋　２０２４　４

授業・自治　主権者教育とはなにか

要求運動のデモを見たとき、ヨーロッパでは７割の人が共感の感覚を持つのに、日本の若者は３割しか共感を感じない。７割の若者が嫌悪または無関心であるという。この３０年間もの間、実質賃金が上がっていない国は先進国といわれる中では日本だけで、子どもたちの７人に一人は相対的貧困で、町では食事に不自由する子どもたちに子ども食堂が行われている。若者が安心して子どもを産める環境にはなく人口減少に歯止めが効かない。福祉は切り捨てられ、防衛費だけが突出して上昇し、戦闘機を先頭に武器輸出までもが与党間の議論にのぼっている。憲法の戦争放棄の理念はどうなっているのだろうか。

最近、GDP でもドイツに抜かれた。そのドイツではイノベーションにより、賃金の上昇と週休３日間が実現するところまで来ている。まさに資本主義の成果を国民の生活向上、労働時間の短縮に活用し、成果を上げているのだ。フランスでもイギリスでもヨーロッパでは生活向上のための要求運動、労働運動は激しく、それは政策として実現し、労働者の生活の向上や労働時間の短縮へとつながり、豊かな人生への条件を作り出している。

しかし、同じ先進国といわれながら、一方日本では労働運動は弱く大きな労働組合は体制内化し、ひどい所では労働者を監視し、労働者の要求運動を妨害し資本の思うようにコントロールする役目を自らはたしている。今や辛うじて元気なのは、地域での小さな要求運動だと言える。しかし、それとても「あんた意識高い系ね」などと揶揄され SNS などで誹謗中傷される事態である。

確かに、今何かがおかしくなっている日本で、この「変さ」を何とかしなければならない。

この「変さ」の根本問題は何かと言えば「包摂」という問題だと考えている。要するに労働者が会社に包摂され、国民が国家に包摂され、住民が自治会に包摂され、教師が学校に包摂され、子どもすらも学校に包摂されて自由を失っているのである。

その集団の従順なよき一員であることがシャワーのように浴びせられる中で、要するに「主体者教育」「主権者教育」がないがしろにされ、よき一員としての教育がその人の人格までゆがめる結果になっているということだと思う。本来よき主体者

こそがその集団に新たな息吹を呼ぶ、よき一員であるはずなのによき主体者が揶揄され、その集団の妨害者として扱われることになっている。

アクティブラーニングは偽主体者教育となる

ここで二つの問題を提案しておきたい。一つは「主体的・対話的でより深い学び」俗にいうアクティブラーニングは何をもたらしたかという問題だ。このお題目に異議を唱える者は誰もいないが、このお題目がもたらした教育実践で子どもたちの学びが変わり、「主体者教育」が前進したということは全くない。授業の中に「話す、聞く」が多くなったに過ぎず子どもたちの輝きはさほどではない。その理由は明らかである。それは主体的であることを求められる教育は「主体者教育」とは真逆な主体的ポーズを求められ、包摂を強いる隷属教育だからである。

そして、それは「主体者教育」という観点のない教師の実践では自治の萌芽を育てるどころか、自治の萌芽を摘み取り、萎えさせる教育へと転落してしまう教育になっていく。

教育におけるもう一人の主体者

私たちが求める「授業・自治」とはまず根本において「主体者教育」でなければならない。では、「主体者教育」はどのように行われるべきなのか。それは初めから子どもたちに「主体者」を演じさせることではない。それは教育のもう一人の主体者である教師が自分の確立した教えを、授業を余すところなく子どもたちに提供することから始める。説明文はこう学び、文学はこうして深める。理科は社会はこうして学び、ノートはこう取る。班活動はこうする。学級会はこうする。このようなことを4月5月に徹底して指導する。まずは教え、模倣することからすべての教育、すべての「主体者教育」は始まるのだ。教育のもう一人の主体者の働きかけが明確であればあるほど、子どもたちは自分の意見を表明しやすく、凛々しくふるまうようになる。壁がなければ子どもたちはよじ登ろうとしないし、自分の意見をその対立物にぶつけることもできないのだ。

私が中堅の学力研実践者に期待しているものは手探りの実践ではない。確立した授業実践を提起し、その中でいかに「主体者教育」を実践するかである。そして子どもたちの意見を取り入れ、手直しすると同時に、この手直しという行為の中から自治の萌芽をはぐくみ大きく育てて欲しいと考えているのです。

二つ目の問題は自治の萌芽の問題は指導者の自治というものに対する、あるいは「主体者教育」というものに対する理解の度合いによって大きくその質が変わるという問題です。

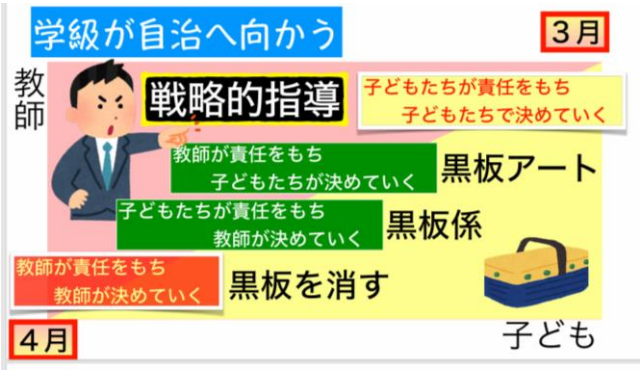
この問題は私たち教師自身の問題、としてまた、日本の教育の在り方、日本の教師としていかに生きるのかの問題としてその実践内容と共に5月号で深めていきたいと思います。

学力研「春の先生のための学校」２０２４年　オンライン講座
第１回　３月２４日　報告

鈴木基久

◆講座１　岸本ひとみ
「保護者とともに子どもを伸ばす！保護者とつながるためのちょっとしたコツ」
イマドキの保護者
〇自子中？　わが子しか見えない
〇つながりを作るのが下手
　「LINEでなら連絡できます」
教育は、共育
〇よくぞ育ててくださいました
　お互いに尊敬し合う
　失敗は素直に認めましょう
〇保護者も自律へ
　６年間で成長してもらう
学級通信で知らせる
クラスの取り組み
　同じことを３度は
　読みやすくする工夫
連絡帳をフル活用
〇週に１回のペースで
　子どもの様子をひとこと
　褒めるときは盛大に
　返事は求めない
◆講座２　丸小野聡暢
「スムーズにスタート！新年度準備チェックポイント」
準備１　１年間のビジョンをもつ
　子どもとの出会いから、１年後の姿をイメージする。
　学級開きは安心感を与える。信頼をつかむ丁寧さと笑顔が重要。信頼がなければ先生の言葉は響かない。
準備２　始業式まで〇日間
　担任の思い、願い、夢を語る。
１日の見通し、１週間の流れの計画が大切。（子どもの名前を覚える）
準備３　システム、環境を整える
　席替え、宿題、提出物、朝の会、帰りの会、給食（おかわり、残し方）、掃除、掲示物、係、机の整頓
◆講座３　加藤英介
「板書ってどうする？」
よい授業はよい板書から
・内容を整理（伝える、支える、確認する）
・板書とノートはセット
・ノートに書きたくなる言葉かけ
「４月は一緒に丁寧に書こう」
文字の大きさ、書く量、色チョーク、速さ、消しながら確認
よい板書でよい授業を　分かった、できた、楽しい授業が増える。
考え、整理、活用する力が伸びる。
◆講座４　加藤英介
「学級が自治へ向かう、一年間を見通した学級経営術」
「学級が自治へ向かう」とは、「子どもたちが責任をもち子どもたちで決めていく」こと。これは最初からできないから、まずは「教師が責任をもち教師が決めていく」ところから始める。授業や朝の会、帰りの会、

係活動、給食、掃除を通して３学期の姿を見据えながら、段階を踏んで子どもたちが決めていくことを増やしていく。その際指導と評価で信頼をつかむ。一貫性のある指導と柔軟性のある指導が大切である。



◆講座５　荒井賢一

「知的で楽しい・わかる！できる！の授業開き」

５・６年生　社会科

知っている国の名前を発問

・情報を共有して知識の差を埋める

まずノートに知っている国名を書く。列指名で、みんなが発表できる。

その後、挙手指名をする。この方法で皆に対して答えを言うようになる。班で立たせて答えを言う方法もある。一人で答えるより抵抗感が減る。

「世界で一番強い国は？理由も」

黒板に書かせるが、理由だけ書く。最初は子どもの知っている知識を共有し、次に教師が教えたいことを入れていく。

◆講座６　吉田雅直

「音読指導が子ども・学級を変える」

音読のすすめ

・いつでも、どこでも、だれにでも

・みんなで取り組める

・学習規律を育てる

・脳の全身運動

音声言語の力を借りながら、文字言語の力を効率よく鍛えることができるのが音読

音読指導の技

・声を張る・単語の頭の音をはっきりと発音・読点（、）までは、ひといきで読む。読点で息を吸うと、次の発音が明確に。・句点（。）では、その一文を聞き手がイメージできるだけの間をとる。個別指導で集団を高める。短時間でも一人ずつ聞いてあげる時間をもつ。

《受講者の感想より》

・加藤先生や吉田先生の話では、教育活動の後に、ちゃんとその評価を、それもプラスの評価をして次の活動の意欲づけをしていることが改めて大切だと思いました。岸本先生の話では、子どもだけでなく、親も共育していく視点が必要だということ。同じことを何度も伝えることは、面倒くさいと思っていたのですが必要なのですね。荒井先生の授業提案は、新しいネタを教えていただきいつも刺激されます。授業の基本は貫かれていて、自身の授業で大いに参考にさせていただきます。

・新年度に向けた様々な情報をありがとうございました。専科ですが、活かせることが多く大変勉強になりました。岸本先生の「保護者の成長」という言葉が印象に残りました。大切なとらえ方だと思いました。

子どもの自己肯定感と学力研実践　―　高垣忠一郎さんを悼む

春日井学力研　　山口左知男

年明けの一月三日、「自己肯定感」という言葉の産みの親であり、登校拒否・不登校問題全国連絡会の世話人代表を務めてこられた臨床心理学者の高垣忠一郎さんの訃報を知りました。私は、子どもたちの自己肯定感を育てることが今の日本の教育の一番の課題だと考えています。その根本の部分を高垣さんの多くの著作から学びました。高垣先生への感謝と追悼の意味も込めて、子どもの自己肯定感と学力研実践の関わりについて若干稿を起こしたいと思います。

今や有名書店では一つのコーナーができるほど、日本社会に定着した感のある「自己肯定感」ですが、この言葉が世に登場したのは三十年前に遡ります。長年不登校の若者や子どもたちのカウンセリングを続けてこられた高垣さんは、「俺なんか」と自分の存在を否定する彼らに寄り添い丸ごと受け止めながら、「そのままの自分でいい」「自分が自分であって大丈夫」という「自己肯定感」を育てることの重要性を提唱されました。

高垣さんによると、自己肯定感には二つあります。①自分をかけがえのない存在として「丸ごと」愛し肯定できるという「共感的な」自己肯定感と、②役に立つ能力や特性をもっているからその「部分」を「評価」して自分を肯定するという「条件付き」の自己肯定感です。高垣さんが重視したのは①であり、赤ちゃんの頃から愛され可愛がられる中で育っていく根源的な自己肯定感、つまり、「自分が自分であって大丈夫」という自己肯定感です。そして、自分の頭で考え、自分の心で感じたことをもとに、自分の人生を選んでいくためには、この自己肯定感が膨らんで大きくなる必要があると言われました。このような「自分が自分であって大丈夫」という自己肯定感という言葉は、自分の生き方に悩み苦しんでいる若者たち、子どもたち、彼らに寄り添い苦しんでいる保護者たちに共感をもって受け止められ広がっていきました。

ところが、自己肯定感が世の中に認知されるようになるにつれて、①ではなく②を特化した自己肯定感が登場します。「みんなより上手だからすごい」という、他者より優れている、あるいはそう見なされていると思うことで自分を肯定する感情、つまり相対評価による上下関係において自分の「力」を肯定していく感情を自己肯定感と表現しそれを重視する風潮が生まれていきました。それは、政財界・文科省などの主張にはっきりと表れるようになりました。そこで言われる肯定は、「存在」の肯定ではなく「力」の肯定でした。本来悩み苦しんでいる子どもたちに共感し彼らを肯定していくものであった「自分が自分であって大丈夫」という自己肯定感とは全く正反対の主張へとつながっていくものでした。それは、子どもたちを「人材」としてみなし、個々の部分的な「資質・能力・特性」を「評価」し、その「評価された」自分を肯定していくという考え方であり、「弱い」自分を肯定するのではなく、それを否定し「強い」

自分を育てていくことを大事にするという自己肯定でした。こうした自己肯定感は相対的なもので、大きく育っているように見えても、環境が変われば一度に小さくしぼんでしまう不安定なものです。したがって、子どもたちは、その不安にかられ、周りからさらに「評価」されるために半ば脅迫的に努力を続けることを迫られることになります。その結果、自分が何をしたいかよりも、他人にどう評価されるかということがとても気になる子どもたち、「部分」を少し否定されただけで、まるごと自分を否定されたような気がして大きなダメージを受けてしまう子どもたち、自分の考えや自分の気持ちに従って、自分の行動や人生を選ぶことが困難になってしまうという子どもたちの存在が顕著になってきました。私が日頃接する大学生たちがそれなりに学力の備わった若者たちであるにもかかわらず、自信がなく、完璧でない自分を否定したり、自分の未来に大きな不安を抱えていたりすることにはその影響が表れています。高垣さんは、こうした動きに危機感を強め、ここで強調される「自己肯定感」を「競争的自己肯定感」と呼び、絶えず警鐘を鳴らし続けてきました。

高垣さんの「自己肯定感」の概念を受け継ぎ、さらに膨らませ、実践的にその重要性を指摘されたのが特別支援教育の研究者の方々でした。

ASD 教育の研究で著名な別府哲さんは、高垣さんの提唱する「共感的自己肯定感」を学校教育の中で育むには、二つの支援が必要だと言われました。一つ目は、「今ここで」「他者より」「できる」ことではなく、過去の自分と比較して「できる」「わかる」ようになることを増やし、かつそれが本人の喜びとつながるようにすることであり、もう一つは、できない自分、がんばれない自分を受け止め認めてくれる他者の存在であると言われています。

一つ目のことは、「昨日の自分に勝つ」「ライバルは昨日の自分」、まさに学力研の実践そのものです。私自身も、「ライバルは昨日の自分」をクラスのメインテーマにして実践に取り組んできました。大学の講義でも自分の実践を紹介することがありますが、学生たちはこのキーワードがとても好きです。他者と比較する中で自己を肯定させられてきた学生たちにとって、自分を直視し自分の成長を大切にし肯定していくという感覚は、とても新鮮に映るようです。

二つ目のことは、一昨年の全国フォーラムで強調されていた「つながり」というキーワードに結びつきます。わからなさや間違いに不安を抱える一見ネガティブな自分を否定するのではなく、それを抱える辛さや悩みを出し合える他者と出会えることが自分を肯定的に受け止める大きな力となり、つながりをつくるということです。学力研の学力づくり・授業づくりの根幹を流れるものであるかと思います。

この一つ目の活動と二つ目の活動がつながっていくことがこれからの学力研実践の目指すところではないかと考えます。

驚愕と共感をもとにした新しい子ども理解の研究で知られる赤木和重さんは、やはり ASD 児たちを前に、「ありのままの自分でいい」「何もできなくてもそこにいていい自分」という自己肯定感を育て、その安心を出発点として今の「自分がいいねん！」

という感覚、つまり自己効力感をもつように後押ししていくことが大切だと言われています。つまり、子どもの「存在要求」を土台とした「発達要求」に応えていくということです。子どもが「自分でいい」から「自分がいい」という感覚を持ったとき、子どもたちは一気に伸びる。いまの子どもの状態を「欠けている」と見るのではなく、今子どもが持っている「手持ちの能力」の中に、その原石の中に「素敵」なものを見つける大人のまなざしが大事で、その原石を集団の中で輝かす指導を大切にする必要があると言われています。その子の「手持ちの能力」にみんなが食いつき、その素敵さを褒めたり讃えたり味わったりしたときにはじめて、周りのしていることや周りの子に関心が広がり、次への挑戦の意欲が生まれてくる。つまり、子どものもつ行為を素敵に意味づけ集団の中に位置づけていくことが、子どもの持っている能力の全面的開花につながる。これは特別支援教育の中で特に言われていることでありますが、まさに子どもたちの「見えない学力」の重要性を語っていると言えます。岸本裕史さんは、「見えない学力」の柱の一つである「自律的文化」は「子ども自身の内発的な要求に基いた能動性の発揮される文化」であると表現されています。「手持ちの能力」が集団の中で輝いたとき、子どもに今まで興味のなかった未知のものへの挑戦が生まれてくるというプロセスが重要です。

こうして考えていくと、学力研の目指しているものと子どもの自己肯定感の形成とは深くつながっています。

「自己肯定感」は決して子どもたち・若者たちだけの問題にはとどまりません。私たち教師の問題でもあります。昨夏の全国フォーラムで、久保先生が「教師はサービス業ではない」「教師は未熟で成長する存在だ」ということを強く言われました。頷きながら聞いていましたが、これは教師が自己肯定感を高め成長していくための大事な視座です。今これが危うくなっています。私たちが若手と呼ばれていた四十年前の時代は、親たちが教師を育ててくれました。時にぶつかることもありましたが、基本的には若い教師の無茶や失敗を大らかに受け止めながら、教師の専門性について無条件に一定の信頼をおいてくれました。至らないところ、未熟なところを多々持っている自分を、自分自身も「思いやり」をもって見る、他人もそれを「赦す」という「思いやり」や「赦し」の関係が私たちの自己肯定感を育ててきたと言えます。ある部分それに甘えながら、私たちは失敗を恐れず、反省と肯定を繰り返しながら、好き勝手な

（?）実践を積み重ねてきたとも言えます。そうした土壌が消えつつある今、「自分が自分であって大丈夫」という教師自身の自己肯定感が危うくなってきているように見受けられます。誠実に子どもの課題に取り組もうとしている先生ほど、自分の「失敗?」やつまずきに悩み、自分の実践や自分自身を否定し自分を追い詰めているように思います。反対に、最近サークルの話題の中によく登場しますが、子どもたちのつまずきや分からなさを自分の問題として考え切磋琢磨するのではなく、それを子ども自身の自己責任とし、「笑顔」で進度を進めていく若い教師の存在。子どもが伸びるのは自分の成果、伸びないのは子どもの責任という手前勝手な論理です。私は、「子どもを真ん

中にして親さんと手に手を取って」というのを実践の起点にして、その関係性が「ぬるま湯」になることを心がけてきました。今親との関係、子どもとの関係、子どもたち同士の関係の中にこの心地よい「ぬるま湯」をつくっていくことが教師自身を守り高めるために大事なことのように思います。

以上、自己肯定感の構造と学力研実践との関わりについて、簡単に拙論を述べてきました。高垣さんは、自己肯定感を「心の浮輪」と呼ばれ、それを「膨らませる」という表現をされました。私は、全員の自己肯定感が大きく膨らめば、クラスからいじめは消えていくと考えて実践を続けてきました。それを子どもたちが教えてくれました。自分を取り巻く集団とのつながりに支えられ自分の存在に安心感をもち、「昨日の自分に勝つ」という外に向かっての挑戦の意欲が高まったとき、いつまでも同じ関係性にとどまり内側に向かっていじめを繰り返すということはつまらないことに見えてきます。子どもの現状から出発し学力研が大事にしてきたものを発展させていくことが子どもたちの自己肯定感を大きく膨らませていくことを確信します。自分は今小中学校の現場からは離れていますが、高垣さんが三十年にわたって伝え続けてこられたメッセージを大切に実践づくりに関わっていきたいと思っています。最後に、高垣さんの詩を付記します。

詩「自己肯定感」

「よし、よし」と撫でてやる
やさしい声で撫でてやる
「よし、よし、おしっこでぬれたか」
「よし、よし、ウンチでよごれたか」
「きもちわるいか　よし、よし」
「いまおしめかえてやるからね　よし、よし」
「おなかすいたか　よし、よし」
「いまおっぱいあげるからね　よし、よし」
「おなかいたいか　よし、よし」
「おなかさすってやるからね　よし、よし」
「イタイの、イタイの、とんでいけ～　よし、よし」
その「よし、よし」は「わかったよ」の「よし、よし」
「だいじょうぶだよ」の「よし、よし」
「心配しなくていいよ」の「よし、よし」
なによりも、「ゆるし」の「よし、よし」
ぼくの自己肯定感の「肯定」は、この「よし、よし」
この「よし、よし」をいっぱいもらって
ふくらんでいく「よし、よし」
こころにいっぱいもらった「よし、よし」で
自己肯定感がふくらんでいく
そうすると、つらいとき、しんどいときでも
自分で「よし、よし」できるようになる
苦しい自分に自分で「よし、よし」できるようになると
「自分が自分であって大丈夫」と感じる
それがボクの自己肯定感
安心が海のように広がっていく
その海に身をゆだねて「ポッカリ」と浮かぶ
安心の「浮き輪」を抱いて
ゆっくり　のびのびと　泳いでいく　それがボクの自己肯定感

局長だより　4月

◇学力研最新情報　岸本ひとみ

●コスパで考えると

教員という仕事は、コスト（経費）とパフォーマンス（効果）が、必ずしも一致しないものです。今のZ世代では「タイパ」という言葉も使われるようです。こちらは、タイム（時間）とパフォーマンス（効果）という意味ですね。どちらにしても、かける労力や時間に比して、効果が低いかもしれないのが、教員という仕事です。学校現場がブラックだと言われて久しいのですけれど、コスパやタイパが通用しないのが、その一因なのかもしれません。

教員という仕事は、ある意味職人ではないかと思います。ドイツ語でいうとマイスターですよね。英語ではクラフトマンです。修業する年期が必要で、その技が認められるまでに長い時間がかかるということでは、職人です。

今すぐにはコストとパフォーマンスが一致しないけれど、修業しだいでは、一致させる年限を短くすることができるのではないでしょうか。

●学力研のめざすもの

私たち、「学力の基礎をきたえどの子も伸ばす研究会」のめざしているものは、このコスパをできるだけ一致させるようにしていくことなのです。

「いつでも、だれでも、どこでも」できる実践ということは、コスパがすこぶるいいということになります。また、最近は、そこに「授業づくり」を加えていっていますから、ここで学べは、わりと短期間でマイスターになることができると思います。

実際、「先生のための学校」の卒業生たちは、日本中あちこちの地域や学校で活躍していますし、お互いの交流も盛んです。困ったときは、相談し合える研究会仲間がいることが、マイスターへの最短コースです。楽しく、子どもたちを伸ばすために、ぜひ会員としてご参加下さい。

◇事務局だより　岡本　美穂

●春の先生のための学校

始まりました。ご感想です。

・有難うございました。岸本先生の保護者とのつながりについては、なるほどとおもうことがとても多くありました。来週の講座も楽しみにしています。

・授業開きも伝えたいことを考えて用意したいと思いました。チャイム音読、今年もやっていこうと思います。ありがとうございました。

・新年度に向けた様々な情報をありがとうございました。専科ですが、活かせることが多く大変勉強になりました。岸本先生の「保護者の成長」という言葉が印象に残りました。大切なとらえ方だと思いました。

・ありがとうございました大切にしたい視点が見えて良かったです。今後ともよろしくお願いいたします！

・今は春休み期間ですが、休みはあっという間に過ぎるので、今からできる限りの準備をするためのモチベーションが高まる時間でした。ありがとうございました。

◆4月6日
学力研・新学期スタート講座
13:30～15:30
新学期!出会いから子どもたちのやる気を引き出し、学び合い・支え合い・高め合うクラスを創っていくには。そのノウハウと考え方を学び合うセミナーです。
テーマ「1年間を見通した授業づくり・学力づくり・学級づくり」

◆春の先生ための学校第3回目
5月18日（土）対面講座
たかつガーデン：対面講座のよさ、それは「感情が揺さぶられること」です。講師の「非言語情報」が参加者の感情に刺激を与えること間違いありません。
◆講座①　実践報告①
◆講座②　宮川先生
◆講座③　久保先生
◆講座④　QA講座
振り返り
https://www.kokuchipro.com/event/f7c28f96e55a7d5d1e5ab0773710474c/

学力研カレンダー

≪各地のサークル・部会　２０２４年　４月　例会、イベント≫

どなたでもご参加いただけます。お誘い合わせのうえお越しください。お待ちしています。

※会場等使用状況により、変更の可能性もありますことをご了承ください。

4/

２０（土）みなみ学力研　9 時半～12 時　阿倍野区民センター　図書 nobu580701@yahoo. co. jp

２６（金）春日井学力研　18 時半～　レディヤン春日井(JR 勝川駅)　山口 080-6904-1697

２７（土）大阪教育サークルはやし　午後　エルおおさか　荒井 aik28501@bca. bai. ne. jp

オンライン開催のサークルには、参加方法を連絡先にお尋ねください。

下記サークルも活動していますので、翌月以降の日程のお尋ね等はご連絡下さい。

○　神奈川学力研　10 時～12 時　県民サポートセンター７０４号室（横浜駅西口）　湯浅 090-1104-4667

○　いろえんぴつ（加印）　18 時半～　稲美町ふれあい交流館　岸本 090-9117-6330

○　伊丹学力研　18 時半～　※阪急武庫之荘駅近く　前田 090-9715-3830

○　持ち方書き方研究会　ライン会議で行います。日時や参加のしかたはご連絡を　前田 090-9715-3830

《全国キャラバン等　今後の予定 》

○　春の先生のための学校【全３回】

3月　24日（日）　13時10分～15時【済】　3月31日（日）　13時10分～15時【済】
5月18日（土）　13時10分～16時　対面講座

○　4・6学力研・新学期スタート講座

4月6日（土）　13時30分～15時30分　対面・リモートハイブリッド講座
会場　大阪ドーンセンター　　参加費：１０００円

（詳細はメルマガ「まぐまぐ」、「こくちーず」などで）

（講師派遣希望、サークル情報などは　事務局へ　079-426-5133）

ご意見・ご感想は下記まで

荒井　賢一　E-mail　aik28501@bca.bai.ne.jp

李　詩愛　E-mail　iwamotoshie@gmail.com

堀井　克也　E-mail　katsuya4k1h9@gmail.com